第52回日本伝統工芸近畿展
鑑査・審査講評

第52回日本伝統工芸近畿展の応募作品総数244点から厳正なる第一次鑑査、第二次鑑査を経て211点が入選しました。その中から審査を経て13点の受賞作品を選定しました。今回、新しい試みとして鑑査・審査に参加された７名の学識者の皆さまからの講評を公開いたします。是非ご参考の上、入選・受賞作品をご鑑賞ください。

〈第一部門：陶芸・金工・木竹工〉

鑑審査委員　前田 昭博（まえた あきひろ）
鑑査委員　島崎 慶子（しまざき けいこ）
鑑査委員　大長 智広（だいちょう ともひろ）

〈第二部門：染織・漆芸・人形・諸工芸〉

鑑審査委員　岩井 美恵子（いわい みえこ）
鑑査委員　鈴田 滋人（すずた しげと）
鑑査委員　後藤 結美子（ごとう ゆみこ）
鑑査委員　吉川 節子（よしかわ せつこ）

【第一次鑑査】全ての応募作品の中から入選するに相応しい作品を選定する
【第二次鑑査】第一次鑑査で選定された全作品を再度検証し入選作品を決定する
【　審　査　】入選作品の中から授賞に値する作品を選定する

第一部門（陶芸・金工・木竹工）

鑑審査委員　前田 昭博

日本工芸会陶芸部会長
重要無形文化財「白磁」保持者

この度、近畿展の鑑審査に初めて参加させていただいた。毎回の近畿展図録に掲載されている展覧会趣旨を読むと、工芸文化の伝統を受け継いできた近畿支部の美に対する並々ならぬ意識が込められているように思う。

初日は、第一部門の陶芸・木竹工・金工の第一次鑑査を担当した。陶芸部門は、全部門の中で出品数が103点と最も多く、陶器・磁器の片寄りなく様々な技法を使って制作されていた。木竹工部門は29点の出品があり、木工の刳物・指物に充実した作品が見られた。また、竹工は作品に若々しさや清涼感を感じた。金工部門は、出品数は16点だが、彫金・鋳金・鍛金と技法や形状がバラエティーに富んでいた。近畿支部は全部門にわたって、バランスがとれており、どの部門の作品も質の高さを感じさせる。また、作品鑑査時に、作品の手前に作品名・材料・技法が書き込まれた用紙が置いてあり、鑑査する上でとても参考になった。

２日目は、第一部門、第二部門を併せての第二次鑑査が行われた。その中で、陶芸作品にわずかなひびやピンホールが入っているとの指摘があり、委員で話し合いを重ね選外とすることにした。この支部の二次鑑査に対する厳格な姿勢を感じるとともに、出品者や鑑賞者に対して、ものづくりの厳しさを認識していただく上で適切な判断ではなかったかと思う。

そのあと、授賞選考に入り、各部門から力のある作品が受賞候補としてあげられた。何度も投票を繰り返した結果、過半数を獲得した竹工の市川陽菜氏「輪弧編み透かし花籃『梅開早春』」の作品が日本伝統工芸近畿賞に決まった。細かな竹で編まれた籃は、とても瑞々しく華やかで、竹のもつ特性が存分に発揮された作品で、これまでにない新たな可能性を感じさせる。

その他の受賞作で印象に残ったのは、近畿賞を最後まで争った木工の作品で滋賀県知事賞の松原輝氏「栃拭漆貝型合子」である。刳り抜きされた貝合わせの合子で、何かを包み込むかのような貝型の造形が美しく、内側のフォルムもなめらかな曲面に削られている。拭き漆された栃の木目と形態の一体感が心地よい。陶芸では、京都新聞賞の加藤清和氏「三彩『2301』」の三彩釉の鉢が目を惹いた。伝統的な技法であるが、長年にわたって手掛けており様々な試みをすることで、古典から離れ独自な三彩釉に仕上がっていた。

今回の受賞作や入選作を見ると、今後に繋がる新たな創造の兆しを感じさせる作品がいくつか見受けられた。これは、この支部の実力者の作品やものづくりの姿勢から、部門を超えて影響を受けており、若い作家にとっては大きな刺激を受ける場になっているように思われた。

鑑査委員　島崎 慶子

菊池寛実記念 智美術館　主任学芸員

陶芸については、造形と釉調に洗練がある《三彩「2301」》の存在感が際立ち、また、数少ない蓋物となった《黒釉銀彩陶筥》には、抑えた色彩と軽やかな文様、効果的なイッチンによる静かな主張を見た。入選全体では焼き締め作品が苦戦した印象で、土の表情、造形、窯変を緊密に連動させて、意志を明快に打ち出す必要がある。

金工の出品作では、金属の多様な表情の引き出し方、そしてその見せ方に見所があり、技法の特性とあわせて端的にまとめた作品に力があったといえるであろう。

そして木竹工は若い制作者の意欲的な作品が光った。特に竹は新しいデザインが模索されていると感じるが、その創意を竹の編組として必然ある本格的な制作へ繋げて欲しい。

力作が目を引く一方で、入選率85%の実態とは、その素材、技法による形状が取れていて、創意なり意志なりが感じられ、技術に明らかな難を指摘されることがなければ入選するということである。水準を引き上げて入選の価値を上げる必要があるのではないだろうか。また、個々の制作については公募展という競技の場に応じて様々な創意工夫がされているものの、伝統工芸の枠組みにある自身の制作が、どのようにしてその伝統を進展させようとするものなのか、今一度考えてみるべきであろう。

鑑査委員　大長 智広

京都国立近代美術館　主任研究員

昨年度に引き続き日本伝統工芸近畿展の第一次鑑査を担当いたしました。前回は第二部門（染織・漆芸・人形・諸工芸）を鑑査し、今回は第一部門（陶芸・金工・木竹工）を担当いたしましたので近畿展の現状のおおよそを掴むことができたのではないかと思っています。昨年度同様、今回の鑑査でも、突出した作品は少なかったかもしれませんが、応募作品における平均的なレベルの高さに感心いたしました。これはやはり、長い間都であった京都を中心とした関西のものづくりの伝統が大きいのでしょう。いうまでもなく伝統は私たちの精神的な在り方をなしています。つまり、人々にとって意識的であるか無意識的であるかにかかわらず、伝統は自らに内在しており、それぞれの工芸の捉え方に対してはもちろんのこと、技術や素材の扱いにおいても先人の豊かな遺産が生きています。しかし伝統は、一方で居心地のいい「制度」としても働きます。つまり、そこに寄りかかれば、ものつくりに対しての矛盾や葛藤を抱える必要のない、それだけで世間に受け入れてもらえる環境が広がっているということです。その意味では、自明のものとして捉えてしまっている工芸にまつわる概念やものをつくる行為一つ一つを自らの感性で客観視し、広い視野の中で再考すること、常にこの地点から工芸の現代は始まるのでしょう。修練を積むということが手慣れることではなく、新しい発見につながる経験の連続であることを期待しています。

第二部門（染織・漆芸・人形・諸工芸）

鑑審査委員　岩井 美恵子
国立工芸館　工芸課長

このたび第52回日本伝統工芸近畿展第二部門（染織・漆芸・人形・諸工芸）の第一次鑑査と第二次鑑査、授賞選考に関わらせていただきました。近畿支部のみなさまとご縁はありましたが、鑑審査に参加させていただくのは初めてのことですので、その「らしさ」をたいへん楽しみにしておりました。二日にわたった鑑審査は、初日に第一次鑑査を、翌日に第二次鑑査および授賞選考を行いました。出品作品の第一印象は、どの分野においても技術レベルが高く、上品で重厚な作品が多いというものでした。おそらくこれが「らしさ」のひとつなのでしょう。実際まだ入落も決まっていない作品たちが並ぶその会場は、さながら百貨店のように華やかで上品な展示会場でした。

今回は授賞にも携わらせていただきましたが、その前段階である受賞候補作を決める際に私が意識したのは、高い技術をもって制作されていることは大前提とし、現代性を十分に取り入れているかといった点でした。現代性とは言い換えれば同時代性であり、「今」をどれだけ写し取れているかということに他なりません。それが見えなければ、技術力や表現力が優れていても古いイメージを持たれてしまう可能性があります。工芸の歴史といった縦軸だけでなく同時代の横軸に対してもアンテナを立て情報を収集し自身にインプットしておくことが、作品としてアウトプットする際にとても重要です。この横軸とは、工芸はもちろんのこと、現代アートや最近流行の意匠・デザイン、現代音楽などの芸術分野にとどまらず、社会情勢、身の回りの現代生活など多岐にわたりますが、貪欲に吸収していただきたいと思います。

また、最近日本工芸会は若手作家の新規入会が思うように伸びないと苦戦されているお話をうかがいますが、近畿支部では新しいお仲間が増えているようで、他の支部のみなさまからたいへん羨ましがられる状況ではないでしょうか。今回近畿賞を受賞された市川陽菜さんを始め、受賞者の３割が20代から30代の作り手の方々で、ご本人はもちろんのこと近畿支部の今後の活躍がとても楽しみです。

工芸作品は素材に対する深い理解とそれに伴う技術によって制作されます。鑑賞用の工芸もあれば、生活工芸と呼ばれ日常で使用される工芸もある、非常に幅広い表現分野です。なかでも、日本工芸会に所属するみなさまは技術に対する強い思いをお持ちですが、技術は作り手にとってたいへん大きな力となりますので、その力を余すことなく活用し、時代を映し出す美しい作品を今後も紡いでいっていただきたいと思います。その作品は後世にも引き継がれ、時代の美の証人として存在し続けるのです。

鑑査委員　鈴田 滋人

重要無形文化財「木版摺更紗」保持者

この度、近畿支部展第一次鑑査の委嘱を受け作品を拝見できる機会を得、期待と同時に当支部は伝統文化の歴史を支えて来た地域でもあり緊張感もって鑑査に臨むこととなりました。

鑑査は一部と二部に分かれ、本展に準じながらも独自な方法を取り入れ二部の担当として染織、人形、諸工芸、漆芸の順で学識者の方々と地元選出の作家で当たりました。各部門採点による鑑査を行い、技術の面で疑問がある場合は鑑査委員全員が集まりその部門の専門委員の説明を受け作品としての評価をし、また支部展では地域に根ざした工芸や、埋もれた技法、新人など裾野を広げる役目もあり、そのことも心掛けました。

支部展としてのレベルが高く各部門バランスのとれた出品が見られ、特に受賞候補となった作品は、表現力や丁寧な仕事振りに目が止まりました。一方でこの会の主旨や方向性とは異質な作品、技術や文様に対しての甘さ、更に見えないところへの配慮に欠けるものなどもあり、今後研究会などで検討される必要性を感じました。

会場には北村武資先生と福田喜重先生の遺作が並んでおり、京都ならではの雅な作品に改めて両先生の存在の大きさに気付かされ悔やまれました。お二人の作品に対する熱い思いを受け継ぎ新たな近畿支部の活力を生み出されることを願います。

鑑査委員　後藤 結美子

京都市京セラ美術館　学芸係長

この度、日本伝統工芸近畿展の鑑査を初めて担当させていただきました。今回の応募作品を拝見しますと、多岐にわたる技法や素材にまずは驚かされ、表現様式や内容も、堅実で伝統を意識したものから新しい発想を窺わせるものまで、幅広い内容に目を見張りました。また染織や漆芸、人形には、若年層とおぼしき方々の清新な表現が印象に残りました。

工芸の魅力の一つは、素材の特質から導き出された表現にあります。今回の応募作には、素材と真摯に向き合いながら、その美を様々な形で引き出そうとする姿勢が見られました。素材の特質を理解し、表現と有機的に結びつけた作品が最終的に高い評価を得ていたように思います。また伝えられてきた技術に練達するばかりでなく、その技術をいかに独創的な表現に繋げるかが、現代の工芸に求められていると思います。今回拝見した作品の中でも、評価を得た作品の中には優れた技術力を見せるにとどまらない、新たな表現の在り方を模索するような傾向が見受けられました。

一点一点に作り手の方々のたゆまぬ研究の成果と創意工夫が表れており、貴重な応募作に対して鑑査を行うことは非常に心苦しいものがありましたが、鑑審査は丁寧に時間をかけて、作品本位に、心を尽くして行われていたことに感銘を受けました。

鑑査委員　吉川 節子

京都先端科学大学　特任教授（現 京都先端科学大学 客員研究員）

こんな世界があったの?!　学生を連れて日本伝統工芸展を見学すると必ず彼らが発する感想である。普段手にしているものたちが異なった装いを施されて目の前に現れる。初めて工芸展を見た彼らは驚き、感動し、中には実際に制作者への道を歩こうと固く決意する学生もいる。たった一度の人生ですから、どうしてもやってみたくて――卒業後、果敢に、彼女は竹工芸という未知の世界を選択した。これほどの感動を与える工芸の力とは何か。伝統に培われた技と研ぎ澄まされた感性によって日常を美へと昇華させようとする強い力なのだろう。

今回鑑査する立場になり第二部門の作品と向き合いました。伝統を継承する見事な技を見て感銘を受けたことはもちろんですが、はっとするような驚きを感じたこともしばしばありました。作品からほとばしり出る制作者の熱い思いが胸に突き刺さり共振したのです。こうした驚きを私は何よりも大切にしたいと思います。作品は制作者が背負っている歳月の凝縮です。現在を生きる彼／彼女が感性を磨きつつ、それぞれの思いを納得のいくまで表現する。それは自ずとその人にだけに可能な、今この時代を体現した新しい表現となるでしょう。

震える心を伝統の技で表現し時代を体現した独自の意匠を成立させる。新しい意欲的な試みにもかかわらず意匠の構成が今一歩で残念ながら十分に評価されないこともありましたが、その試みは尊いものです。どこまでもひたすら自らの熱い心を信じて伝統を継承発展しつつ、新たな挑戦を続けていってください。期待しております。

公益社団法人
日本工芸会近畿支部